

特別展 生誕151年からの鹿子木孟郎
—不倒の油画道—



生誕151年からの
カノコギタケシロウ
鹿子木孟郎

不倒の油画道
FROM THE 151ST YEAR
KANOKOGI TAKESHIRO RETROSPECTIVE
RETURN TO REALISM

特別展
2026.1.17 sat. - 4.5 sun.

泉屋博古館 東京
SEN-OKU HAKUKOKAN
TOKYO

【前期】11月17日(土) - 2月23日(月・祝) 【後期】2月25日(水) - 4月5日(日)
【開館時間】11:00 - 18:00 ●金曜日は19:00時まで開館 ●入館は閉館の30分前まで
【休館日】月曜日・2月24日(火) ●2月23日(月・祝)は開館
【入館料】一般1,500円(1,300円)、学生800円(700円)、18歳以下無料
●学生・18歳以下のかたは証明書のご提示が必要です。●20名様以上の団体は()の団体料金。
●郵がい者手帳等ご展示のかたはご本人および同伴者1名まで無料。●2回目ご来館時に本展半券ご展示で1名様1回限り半額。
【主催】公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社 【特別協力】府中市美術館

(納入費) (部分) 個人展

KANOKOGI
TAKESHIRO

2026年1月17日(土) - 4月5日(日)

《展覧会概要》

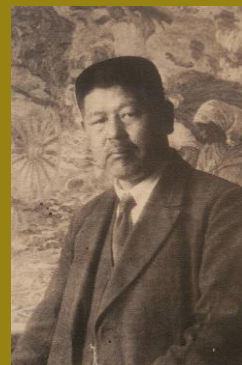
このたび、泉屋博古館東京では、特別展「生誕151年からの鹿子木孟郎 一不倒の油画道一」を開催いたします。

本展覧会は、近代の日本洋画に本格的な写実表現を移植した鹿子木孟郎（かのこぎ・たけしろ）の生誕150年を記念して開催するものです。鹿子木は現在の岡山市に生まれ、はじめ天彩学舎や不同舎で洋画の基礎を学び、のちにフランスへ留学しました。パリでは19世紀フランス・アカデミスムの正統に属し、歴史画の名手として知られたジャン＝ポール・ローランスの薫陶を受け、生涯を通じてフランス古典派絵画の写実表現を追究しました。帰国後は、関西美術院や太平洋画会、文部省美術展覧会の中心的な画家として活躍し、近代日本洋画の発展に確かな足跡を残しています。一方で鹿子木は、留学の支援を受けた住友家15代当主・住友春翠に、師ローランスの代表作のほか自作や模写、その他西洋名画を仲介しておさめるなど、住友家と深い交流を結んでいることも見逃せません。

本展は初期の天彩学舎や不同舎で学んだ素描から、渡仏しフランス古典派の巨匠ローランスに学んだ渡欧作、帰国後の関西美術院や下鴨家塾での活動などを作品により網羅し、生涯の画業を紹介しつつその功績を再考します。とくに師ローランスの写実技法の伝播について再検討を行い、近代日本洋画における写実表現の展開をめぐる問題を検証します。

鹿子木孟郎 KANOKOGI Takeshiro

鹿子木孟郎（1874－1941）は、現在の岡山市に岡山藩士の宇治長守の3男として生まれる。14歳で洋画家・松原三五郎の天彩学舎に入学、18歳で上京し、小山正太郎の画塾・不同舎に学ぶ。1900年に渡米、翌年にはイギリス経由でフランスに渡る。留学中に住友家の援助を受けてアカデミー・ジュリアンで「最後の歴史画家」と称されたジャン＝ポール・ローランスに師事。1904年に帰国した後は、鹿子木家塾の創設や京都高等工芸学校講師を務めるなど、以後多くの後進を育てた。また1905年には浅井忠らと関西美術院を創立し、1908年に第三代院長となった。その後も文部省美術展覧会の審査委員を務めるなど、京都洋画壇の中心的な作家として活躍した。



《基本情報》

展覧会名	特別展 生誕151年からの鹿子木孟郎一不倒の油画道
会 期	2026年1月17日（土）～4月5日（日） 前期：1月17日（土）～2月23日（月・祝） 後期：2月25日（水）～4月5日（日）
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、2月24日（火）※2/23（月・祝）は開館
入 館 料	一般1,500円(1,300円)、学生800円(700円)、18歳以下無料 ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 https://sen-oku.or.jp/tokyo/ TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)
主 催	公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社
特別協力	府中市美術館

《本展のみどころ》

1 約四半世紀ぶりの大規模回顧展を開催、鹿子木孟郎の画業の紹介と再考

鹿子木孟郎はフランス・アカデミズムで学んだ正統的なリアリズムを日本へと伝え、その重厚かつ堅牢な油彩画が高い評価を受けた近代日本洋画の巨匠です。回顧展はこれまで2回開かれていますが、2001年に府中市美術館で開かれた展覧会以降、鹿子木の質の高い作品に触れる機会は限られてきました。本展は東京でも約四半世紀ぶりとなる、本格的な回顧展です。

文部省美術展覧会や太平洋画会の展覧会出品作をはじめ、師ジャン＝ポール・ローランスの作品、あるいは今回の調査で発見された新出作品を含む、約130点から鹿子木の画業を紹介し、彼が目指した表現について再評価することを目指します。

2 近代日本洋画における「写実」の意味

弟子の黒田重太郎が回想するように、鹿子木は「正確に物を観、それを再現すること」を最も大切にしていました。確かに鹿子木の作品には、長い時間をかけて対象と向き合い、それを正確に写し取る姿勢が通底しています。一方で鹿子木作品の魅力は、単に物のかたちを正確に捉えるだけではない、本質に迫る「写実」のあり方を示しています。

印象派以前のリアリズムを根幹とする鹿子木の絵画表現は、日本近代洋画の主流となった黒田清輝たちの外光派の表現とは一線を画します。写実表現が見直される昨今の美術界において、鹿子木の作品は一周回って新鮮な驚きと絵画の豊かさに気が付かされます。

本展では多数の不同舎時代の風景スケッチや渡欧期の裸体人物写生など、鹿子木における写実表現の形成と展開をご覧くださいます。

3 パトロン・住友

1900年（明治33）に父を亡くした鹿子木は、不同舎の学友とともに欧米遊学へ出発しました。パリで出会った浅井忠から長期滞在を勧められた鹿子木は、住友家に支援を願い出て、2年間留学延長できる奨学金を受けています。その代わりに鹿子木は、師のジャン＝ポール・ローランスを含む西洋絵画の実作を住友家にもたらし、さらにはアングルやコローといった名画の模写も収めています。その後も住友家の後援により、1906年（明治39）と1915年（大正5）の2回にわたり渡仏し、当地で本格的な絵画学習を果たしました。

本展では、近代における洋画家支援の様相、また画家とパトロンの親しい交流を紹介します。



鹿子木孟郎
《厨女図模写（原画ジョセフ・バイユ）》
1901-03年頃(明治34-36) 泉屋博古館東京

《展示構成》

第1章「不倒」の洋画家への旅が始まった。

鹿子木孟郎（1874-1941）は、岡山の旧岡山藩士の家に生まれ、14歳で洋画家・松原三五郎の天彩学舎に入門し、洋画の基礎を学んだ。さらに岡山中学予備校で図画教師を務めた後、18歳で上京し、小山正太郎の不同舎で写実表現を磨いていった。不同舎では鉛筆による「ただ一本の線」で素描することを重点的に学び、東京北部近郊から武蔵野風景を描いた多くの鉛筆素描を描き残している。

1895（明治28）年、文部省教員検定試験に首席合格した鹿子木は、滋賀県尋常中学をかわきりに、三重県尋常中学、さらに埼玉県師範学校で美術教師を務めている。この間、1898年の明治美術会創立10周年記念展には水彩画と油彩画を出品し、高い評価を受けている。不同舎で学んだことに因んで後に自ら雅号を「不倒」とした鹿子木は、その名の通り、倦まずたゆまぬ写実表現の探究と画業の積み重ねを志していった。

本章では、14歳で描いた精緻な水彩画に見る写実表現の芽生えから、鉛筆の線と濃淡のみで遠近感や空気感、光の移ろいまでも捉えた不同舎時代の素描、そして観察力と描写力の高さを如実に示す油彩肖像画まで、初期修行の成果を紹介する。



鹿子木孟郎《綾瀬》
1893年（明治26）
府中市美術館



鹿子木孟郎《蓮池》
1893-94年頃
（明治26-27）個人蔵

第2章 タケシロウ、太平洋を渡ってパリまで行く。

1900（明治33）年、鹿子木は不同舎時代の友人・満谷国四郎、河合新蔵、丸山晚霞とともに横浜から太平洋航路で渡米。大陸横断鉄道でボストンに到着し、先発していた吉田博や中川八郎らと合流、ボストン・アート・クラブで水彩・素描展を開催した。その後も各地で展覧会を開き、そこで得た作品売却の収益をもとに渡欧を果たしている。

ロンドン経由でパリに入った鹿子木は、当地で出会った浅井忠から留学延期を勧められ、伝手を頼って住友家から2年間の支援を受けることになった。アカデミー・ジュリアンのジャン＝ポール・ローランス教室に入学した鹿子木は、西洋絵画の基礎である人体デッサンに熱心に取り組み、コンテや木炭によるデッサンから油彩の裸体写生へと進んでいる。渡欧3年目にはトローニー（tronie）と呼ばれる人物肖像の習作や、ルーブル美術館等における古典模写により、鹿子木は多様な写実表現を吸収して描写力はさらに進化していった。

1904年春には足掛け4年のフランス留学を終えて帰国。京都に「鹿子木室町画塾」を開設し、京都高等工芸学校講師や聖護院洋画研究所で後進を指導している。一方、太平洋画会や関西美術会などの展覧会に、留学の成果を示す滞欧作や日本の当代風俗を主題にした解像度が高く重厚な作品を次々と発表し、画壇における地位を確立していった。



鹿子木孟郎《棒を持つ男の裸体》
1903年（明治36）
個人蔵



鹿子木孟郎《白衣の婦人》
1901-03年頃（明治34-36）
京都工芸繊維大学美術工芸資料館
（AN.2298）

特集 鹿子木の師ローランス

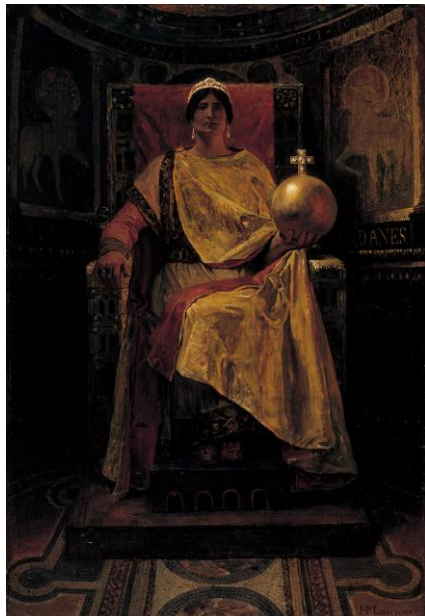
19世紀後期フランス・アカデミーの画家ジャン＝ポール・ローランス（1838-1921）は、フランス南西部のフルクヴォーに車大工の子として生まれた。教会の装飾画の職人見習いを経てトゥールーズ美術学校で学び、絵画コンクールでパリ留学の奨学金を得たローランスは、1860年よりエコール・デ・ボザールに入学する。1867年以降はサロン出品作の国家買上げが続くなど注目を集め、1885年には同校の教授に就任、また1890年からはアカデミー・ジュリアンで教室をもった。さらにはアカデミー会員、評議員となり、名実ともにフランス画壇の重鎮となっていった。このように地方出身から中央画壇で成功した経歴は、旧藩士の家に生まれ地方から上京した鹿子木自身と重なり、鹿子木にとって希望の象徴であった。

ローランスは光と闇の対比によるドラマティックな空間に、歴史的人物を精緻な写実表現で描き出しながら、人間心理や感情の機微を鋭く捉える作風を特徴とした。鹿子木はパンテオンや市庁舎の壁面、あるいは住友に届けたローランス盛期の代表作から、つぶさにその写実表現を学び取っている。一方、ローランスから直接指導を受けた1901～1917年はローランス晩年にあたり、実際に鹿子木が触れていたのは象徴主義的な作品をはじめとする、画家のレイト・スタイルだったことも忘れてはならない。

本章では、鹿子木が住友に届けたローランスの代表作から、鹿子木が旧蔵していた習作までを紹介する。



ジャン＝ポール・ローランス
《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》
1877年 泉屋博古館東京



ジャン＝ポール・ローランス
《イレヌ》1896年
府中市美術館



ジャン＝ポール・ローランス 《年代記》
1906年 泉屋博古館東京

第3章 再び三たびのヨーロッパ。写実のその先へ

1906（明治39）年2月、鹿子木孟郎は斎藤与里、伊庭慎吉とともに2度目のフランス留学へ出発し、パリでは再びアカデミー・ジュリアンに入りローランスから直接指導を受けている。この留学では「峻烈な油画裸体写生の研究に没頭」したというが、1907年サロンに《少女の図》を出品、翌年には《ノルマンディーの浜》《漁夫の家》が入選するなど、大きな飛躍を遂げている。確かな自信を得て1908年に帰国した鹿子木は、京都高等工芸学校講師や文展審査員、関西美術院長を歴任し、関西洋画壇の中心的存在となるが、文展をめぐる派閥抗争や中澤岩太との対立により公職を退き、中立売画塾を開いて自作研鑽に専心している。

1915（大正4）年には、駐仏大使松井慶四郎と、パトロンのひとりであった松風嘉定の支援で3度目の渡仏を果たし、とくに「絵画のコンポジション」の研究に注力している。さらにこの留学では象徴主義の画家ルネ・メナールと交流し、その幻想的な風景表現に学ぶなど、表現領域を広げていった。

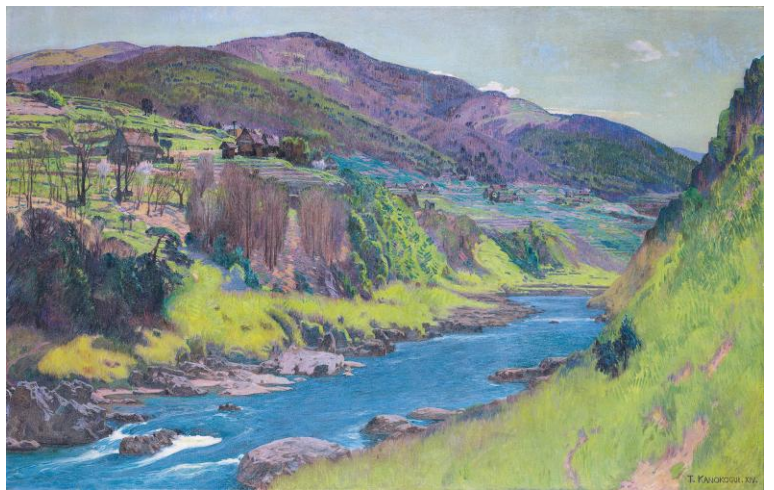
このように鹿子木の3度にわたる留学は、いずれも明確な課題意識のもとに実施されたもので、それぞれが鹿子木の画業の進展と密接に結びついていた。鹿子木は留学を通じてリアリズムの画家としてその立ち位置を確認する一方で、同時代の絵画動向にも目配せをして、次なる展開を模索していた様子がうかがえる。



鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》
1907年（明治40）泉屋博古館東京



鹿子木孟郎《ショールをまとう女》
1906-07年（明治39-40）府中市美術館

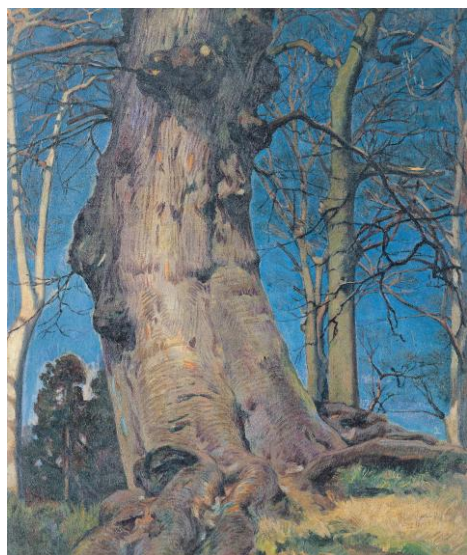


鹿子木孟郎《山村風景》
1914年（大正3）岡山県立美術館

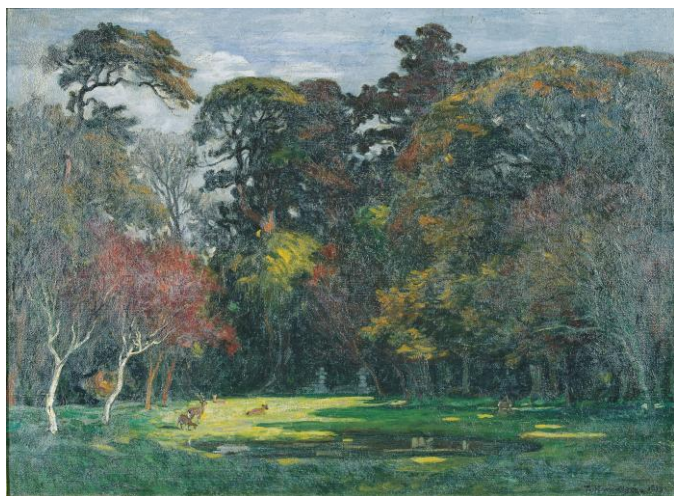
第4章 象徴主義の光を受けて ― 不倒の画家、構想の成熟。

ルネ・メナールの幻想的な風景画は、写実にとどまらない、より観念的な表現への契機を鹿子木にもたらした。1918（大正7）年の帰国以降、鹿子木の表現はより精神性を帯び、象徴的な方向へと深化していく。例えば、《奈良の秋》や《木の幹》には、写実に根ざしながらも、自然の背後に潜む精神的な深みを象徴的に捉えようとする姿勢がうかがえる。また、寓意的な人物画や象徴主義的な歴史画においても、写実に裏打ちされた構成力によって、精神性と象徴性を融合させた構想画が展開された。加えて、師ローランスの芸術理念を継承し、関東大震災の被災地を描いた《大正12年9月1日》や明治神宮聖徳記念絵画館の壁画制作《日露奉天戦》、陸軍献納画の《南京入城図》など、社会性を帯びた大画面の歴史画にも意欲的に取り組んでいる。

晩年には裸婦や海辺の風景を繰り返し描いたが、私的感情の表出は抑えられ、普遍的な構成を重視する姿勢は一貫していた。雅号「不倒」は、そうした職業画家としての真摯な姿勢を象徴している。流行や権威に迎合せず、リアリズムの信念を堅持したそのまなざしは、倒れることなく、揺らぐことなく、描くべきものを見据えていた。鹿子木の作品は、写実という厳格な軸のもとに、精神性と象徴性、構成の厳しさと感情の抑制が緊密に統合され、時間を超えて観る者に強い印象を与えている。



鹿子木孟郎《木の幹》
個人蔵



鹿子木孟郎《奈良の秋》
1919(大正8)年
岡山県立美術館



鹿子木孟郎《婦人像》
個人蔵



鹿子木孟郎《大正12年9月1日》
1924年（大正13）東京都現代美術館

《貸出可能画像・キャプション一覧》

画像のお申込み・ダウンロードは、
オンラインリリース（ARTPR）をご利用ください▶▶▶



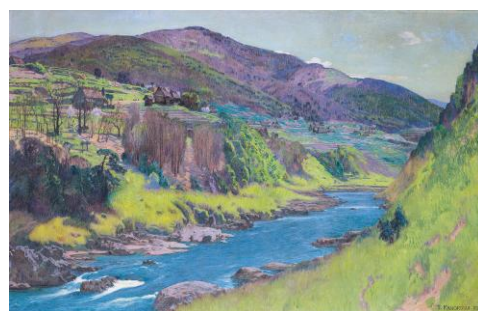
鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》
1907年（明治40）泉屋博古館東京



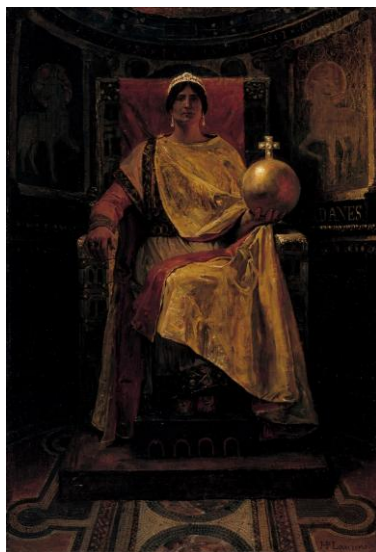
ジャン＝ポール・ローランス
《マルソー將軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》
1877年 泉屋博古館東京



ジャン＝ポール・ローランス《年代記》
1906年 泉屋博古館東京



鹿子木孟郎《山村風景》
1914年（大正3）岡山県立美術館



ジャン＝ポール・ローランス
《イレヌス》1896年
府中市美術館



鹿子木孟郎《ショールをまとう女》
1906-07年（明治39-40）
府中市美術館



鹿子木孟郎《白衣の婦人》
1901-03年頃（明治34-36）
京都工芸繊維大学美術工芸資料館（AN.2298）



鹿子木孟郎
《厨女図模写（原画ジョセフ・バイユ）》
1901-03年頃（明治34-36）
泉屋博古館東京



鹿子木孟郎《婦人像》個人蔵



鹿子木孟郎《大正12年9月1日》
1924年（大正13）
東京都現代美術館

《お問い合わせ先》 泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子

展覧会担当：野地耕一郎（泉屋博古館東京館長）、椎野晃史（泉屋博古館東京 主任学芸員）

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail: pr-tokyo@sen-oku.or.jp